

学校物語(国吉小の巻14)

～祝賀の喜びと憂え～

余木令一

明治三十五年(一九〇二年)春新校舎は完成した。国吉町に於ける教育関係では画期的な出来事である。そして五月二十日の吉日をト(ほく)し新校舎落成祝賀式を行うことも決定された。

当日がきた。鯉のふき流しもいつかな影を消し、ゆたかな麦の穂波がそよぐ時節である。この日、国吉の空はすがすがしくやわらかく風の上に一握りの雲さえ湛(た)たえず、おおらかにひろがっていた。絶好の祝賀日和(びより)である。朝早くから火花が打ちあげられ、全山にコダマして人々の胸をいやが上にもおどらせた。

式に参列する生徒は、父兄は、そして来賓は、或いは表門から或いは裏門から統々と式場に吸われていった。当時の記録をみると生徒を除外しても「参列者二百名を超ゆ」とある。以つてその盛事をしのぶことができるであろう。

しかし、これより前、父兄の間では予見される両校生徒の乱斗沙汰を憂えて、これが対策に、よりよい協議が重ねられていた。何かの動機がきっかけとなつて鬱積が爆発したとき、どんな手段方法でとりしづめるかということについてであつた。だから、ほんとうのところ、このときの父兄の心の中には祝賀の喜びと乱斗の不安とがたがいに相反しつゝ同居していたわけ、心理的には微妙なもの

があつたといわねばなるまい。このような父兄の心をよそに、式は型通りにすすんでいった。

やがて式は終つた。そして祝宴に移る順序となつた。おごそかな式の緊張から解放された生徒も、いよいよこれからは、当時としては珍らしい瓦葺きの校舎に身をゆたねるという意識の幸福感にひたつたためか、式後もなお、心陶然として酔うが如くであつた。

案ずるより生むがやすし、とはよくいつたもの。いざこざどころか生徒のはればれた屈託のない姿に父兄はみな満足気であつた。いや、中には眼に涙を光らせて感激している者もあつた。これでいい、これで何もかも一挙に解決たと心で快哉をさげんだにちがいない。かくて両校生徒の対立、敵対という感情の垣根はきれいにとり払われてしまつた。長い間の宿敵観念が一瞬のうちに氷解し、いまや百八十度大きく転回して一つの学舎(まなびや)にどう兄弟愛にまで昇華したのであつた。

子供の世界は大人(おとな)の世界ほど複雑ではなく、その感情はきわめて単純である。それにしても、例えば選挙の勝敗がきまつたあと、さつぱりと、うちとけるのが外国人の常識であるのに、日本人の多くは仲々執念ぶかいというのが定評であつてみれば、このような人は当時における児童の心の持ち方を回顧して少しは恥ぢ入るがよからう。おとなが子供に教わる。「こりやまたどうしたことか、世の中まぢがつとる、まことに遺憾に存じます。」。流行歌のおどけ文句われをあさむがす。